

広がる「フードバンク」

品質問題ない廃棄食品

品質に問題がないのに、ラベルに印字ミスがあったり、賞味期限が近づいたりなどの事情で捨てられる大量の食品。それらを企業や個人から集め、物資が不足した人々に配る「フードバンク」の取り組みが全国で広がってきている。各地の関係者が集い、課題などを話し合う「フードバンクシンポジウム」も初めて開かれた。(吉田瑠里)

福祉施設などへ再配分

県で設立された「フードバンク関西」(兵庫)は「地産地消型」を理想とし、関西の食品企業100社に活動報告のニュースレターを送り続け、提供企業を広げてきた。昨年からは今年にかけ相次いで設立された各地のフードバンクも、それぞれ特色がある。広島市のNPO「あいあいねっ」とを設立したのは、診療所やデイケア施設に勤務する管理栄養士、看護師ら、栄養指導を行う中で「指導は分かったが、食品を貰うお金がない」と話す独居の高齢者が増

日本の食品ロス
農林水産省の2005年度の推計によると、食品関連事業者、一般家庭から出る食品廃棄物計1900万トンのうち、500万-900万トンは本来食べられるのに廃棄される「食品ロス」。飼料用などに向けられる食品資源の5-10%に当たる。

り、フリーマーケットにブースを出して食べ物を集める。体当たりでの活動で急成長中。名古屋市のNPO「セカンドハーベスト名古屋」は昨年11月一回、どてやくりしている。ほとんどが仕事を待つ約十五人のボランティアが、食料を母子福祉センターや児童養護施設などに届ける活動を始めた。

フードバンクの活動は、食品を提供している食品メーカーからも歓迎されている。カレー専門店「壹番屋」店チエーンの「壹番屋」は、食品を提供している。さらに人材の問題もある。企業への説明や食品の受け取りなどには、臨時対応できるスタッフが必要だが、セカンドハーベスト名古屋の鈴木二郎代表(右)は「メンバーは仕事があるので、平日の昼間に働ける人が少ない」と嘆く。

賛同企業も増加 運営資金や人材が課題

東京都内で今月上旬に開かれたシンポジウムには、主催のNPO「セカンドハーベストジャパン」(東京)をはじめ広島、沖縄、名古屋のフードバンクの運営者らが参加。冒頭であいさつしたセカンドハーベストジャパンのチャールズ・マツシル(左)と、理事長の「毎日東京」だけで六千トンの食料が捨てられている。これを再分配すれば社会が変わってきます」とトレードパン

史がある。日本では二〇〇二年に「セカンドハーベストジャパン」が初めて設立され、食品の提供は豊岡市の主婦奥平智子(右)が昨春秋、一人始めた。福祉施設に電話してチラシを配

えたと感じたことがきっかけだった。「フードバンク沖縄」は豊岡市の主婦奥平智子(右)が昨春秋、一人始めた。福祉施設に電話してチラシを配

(本社・愛知県一宮市)はセカンドハーベストジャパンに野菜パックを提供している。栃木工場長の青木義宏(左)は「提供しているのは真のジャガイモが煮崩れたもの。見た目は悪いが時

間、手間を掛けて作ったもので捨てるより食べてほしい」と話す。商品の提供を受ける福祉施設なども「食費の分を部活動などに回せる」と喜び、母子福祉センターを通じて食品を受け取る愛知県半田市の石川美恵(左)も「中学三年の息子(二人)暮らし。食



▲愛知県母子福祉センターに食料を届けるセカンドハーベスト名古屋のメンバー(左)と母子福祉センターの職員(右)が話している。セカンドハーベスト名古屋のチャールズ・マツシル(左)と、理事長の「毎日東京」だけで六千トンの食料が捨てられている。これを再分配すれば社会が変わってきます」とトレードパン

べ物をいただく、プレゼントのようにつれし

い」と話す。良いことづくめのようなフードバンクだが課題は資金面。各運営団体は企業や個人からの寄付なフードバンク関西の事務局を担当する浅葉めぐみさん(左)は「メンバーがテレビに出た時の出演料も貴重な資金源。最近はお金も少なく、運営

フードバンクの活動は少しずつ浸透しており、浅葉さんは「最近はお金の米や、安売りをせずブランドイメージを守りたい老舗企業からの提供が増え、受け取る障害者が喜んでくれ、エネルギーになっていく」。食品の寄付などの問い合わせは、セカンドハーベストジャパン(電話03-3883-3882)やセカンドハーベスト名古屋(電話052-911-3280)へ(名古屋は個人からの食品寄付は受け付けていない)。